

近代日本宗教史研究と〈皇道〉

——趣旨説明に代えて——

大谷 栄一*

1. ワークショップ「近代日本宗教史における〈皇道〉のポリティクス」の開催

2014年7月27日、共同研究「日本宗教史像の再構築」第3回研究会として、ワークショップ「近代日本宗教史における〈皇道〉のポリティクス」が京都大学人文科学研究所本館1Fセミナー室1で開催された。

この第Ⅱ部は、本ワークショップ登壇者の発表とコメントから構成されている。いわば、ワークショップの記録というべきものである。なお、各論考については登壇者の方々に当日の発表、コメントを活字化していただいた。

当日は、以下のような内容でワークショップを実施し、約20名の参加者によって活発な議論が交わされた。

〈趣旨説明〉

大谷栄一（佛教大学）

〈発表〉

水内勇太（同志社大学大学院）「皇道大本の思想と運動——皇道大本前史」

新野和暢（真宗大谷派名古屋教区教化センター）「皇道仏教と大陸布教——十五年戦争期の宗教と国家」

〈コメント〉

對馬路人（関西学院大学）

* おおたに えいいち 佛教大学

近藤俊太郎（本願寺史料研究所）

なお、對馬氏には水内氏の報告に対して、近藤氏には新野氏の報告に対してコメントをお願いした（以下、人名については敬称略）。

2. ワークショップの企画意図

では、なぜ、このワークショップを企画したのか。その意図と問題意識を記し、第Ⅱ部の趣旨説明としたい。

2-1. なぜ、〈皇道〉を問うのか？

共同研究「日本宗教史像の再構築」では、「既存の宗教史研究の「近代主義的」なバイアスを解きほぐし、それによって不可視化されていた事象に光を当て、新たな日本宗教史像を構築していくこと」を目的としている¹⁾。まさに、これまでの近代日本宗教史研究で「不可視化されていた事象」が、〈皇道〉であるといえよう。このワークショップでは、近代日本宗教史において〈皇道〉をめぐる言説や活動の意義やその役割を問い直すことを目的とした。

今回は「皇道大本」と「皇道仏教」を取り上げたが、このワークショップを企画した直接のきっかけは、新野和暢の著作『皇道仏教と大陸布教——十五年戦争期の宗教と国家』（社会評論社、2014年2月）の刊行である。後述するように、これまで皇道仏教の研究が皆無だったわけではないが、皇道仏教を主題的に取り上げ、実証的に分析したのはこの著作が初めてである。本書のテーマは15年戦争期の日本仏教の思想構造と大陸布教の実態を通じて、近代日本の「宗教と国家」の関係を明らかにすることである。「第Ⅰ部 理論編」で皇道仏教思想の形成過程が検討され、「第Ⅱ部 大陸布教編」で15年戦争期（1931～1945年）における日本仏教の大陸布教の実態が分析されている。

なお、新野は本書の試みが「『戦時教学』という仏教思想を扱う一方で、「国家神道」という問題を仏教の視点から捉え直す試みでもある」（14頁）と述べている。新野の研究は、近年の「国家神道」研究の展開と国体論、皇国史観研究の進展を背景としている。

2-2. 「国家神道」、〈皇道〉、国体論、皇国史観をめぐる研究動向

ここで、こうした研究動向を一瞥しておこう。

「政治的イデオロギーとしての国家神道論による国家神道研究の本格的な幕開けを告げたのが村上重良の『国家神道』（岩波新書、一九七〇年）である」と阪本是丸は指摘する²⁾。刊行後、今年で44年を数えるわけである。その後の研究史については阪本の論文に譲るが、阪本自身、

『国家神道形成過程の研究』(岩波書店, 1994年), 『近世・近代神道論考』(弘文堂, 2007年)等を著しており, また, 『国家神道再考——祭政一致国家の形成と展開』(弘文堂, 2006年)を編んでいる。

阪本は, 村上の『国家神道』刊行以降, 「『国家神道とは何か』といった概念規定をめぐる論議も盛んに行われるようになった」という³⁾。この概念規定について新たな問題提起をしたのが, 島園進である。

島園は, 論文「国家神道と近代日本の宗教構造」(『宗教研究』329号, 2001年)以降, 精力的に「国家神道」研究の成果を公表し, その成果の一端は『国家神道と日本人』(岩波新書, 2010年)にまとめられている。島園は, 「国家神道」を「明治維新以降, 国家と強い結びつきをもって発展した神道の一形態を指す。それは皇室祭祀や天皇崇敬のシステムと神社神道とが組み合わさって形作られ, 日本の大多数の国民の精神生活に大きな影響を及ぼすようになったものである」⁴⁾, また, 「国家神道は皇室祭祀と伊勢神宮を頂点とする神社および神社祭祀に高い価値を置き, 神的な系譜を引き継ぐ天皇を神聖な存在として尊び, 天皇中心の国体の維持, 繁栄を願う思想と信仰実践のシステムである」⁵⁾と規定している。

島園の「国家神道」論の特徴は, 村上重良の「国家神道」論を発展的に継承し, 「国家神道」を「狭義」(神社神道に限定)と「広義」(神社神道, 皇室祭祀, 国体論)に区別したことである⁶⁾。これによって, 国体論と天皇崇敬という主題が再浮上し, その中で〈皇道〉も主題化する。

島園は, 『国家神道と日本人』に先立つ論考「国家神道・国体思想・天皇崇敬——皇道・皇学と近代日本の宗教状況」(『現代思想』2007年8月号, 2007年)の中で, 「国家神道概念が陥っている苦境を克服していくためには, 国家神道と国体思想の関係を明確にしていく必要があると考える」(214頁)と述べ, 以下のように指摘する。

「『皇道』や『皇学』の概念は, 近代の国体思想の特徴をよく示すものであり, 国家神道を支える思想や実践を理念的に表現したものと見ることができる。」(221頁)

また, 「皇道」や「皇学」の問題は『国家神道と日本人』の中でも論じられている。

こうした「国家神道」研究の活性化と呼応するように, 2000年代以降, 国体論, 皇国史観研究が進展する。その主な成果として, 昆野信幸『近代日本の国体論——〈皇国史観〉再考』(ベリかん社, 2008年)や長谷川亮一『「皇国史観」という問題——十五年戦争期における文部省の修史事業と思想統制政策』(白澤社, 2008年)がある。

以上のように, 2000年代以降の近代日本史, 近代日本思想史, 近代日本宗教史において国体論, 皇国史観, そして〈皇道〉の主題化という研究動向が見られる。こうした動向を背景として, 新野の研究があり, 新野の研究もその一翼を形成していると捉えることもできよう。

3. 近代仏教研究のなかの「皇道仏教」

3-1. 近代日本の「仏教と戦争」の研究

ここで、新野の皇道仏教研究を日本の近代仏教研究史の中に位置づけてみたい。

皇道仏教の研究は、近代日本の「仏教と戦争」の研究に位置づけられる⁷⁾。その中でもとくに重要な成果（単行本）として、次の研究がある。

- ・市川白弦『仏教者の戦争責任』（春秋社、1970年）
- ・中濃教篤編『講座日本近代と仏教 6 戦時下の仏教』（国書刊行会、1977年）
- ・Brian Victoria, *Zen at War*, Weatherhill, 1997. =エイミー・ルィーズ・ツジモト訳『禪と戦争——禅仏教は戦争に協力したか』（光人社、2001年）
- ・Christopher Ives, *Imperial-way Zen : Ichikawa Hakugen's Critique and Lingering Questions for Buddhist Ethics*, University of Hawaii Press, 2009.
- ・小川原正道『日本の戦争と宗教 1899-1945』（講談社選書メチエ、2014年）

また、近年の成果として、以下のような研究がある。

戦時中の仏教者の言説を問い直した研究として、福島栄寿「日本主義的教養と1930年代の仏教者——暁島敏と記紀神話の世界」（『季刊日本思想史』69号、2006年）、佐藤平「鈴木大拙のまこと——その一貫した戦争否認を通して」（『財団法人松ヶ岡文庫研究年報』21号、2007年）、星野英紀「高神覚昇と『般若心経講義』」（『仏教文化学会紀要』18号、2009年）等がある。

15年戦争期の「日本仏教」言説や仏教界の動向を検討した研究として、オリオン・クラウタウ「十五年戦争期における日本仏教論とその構造——花山信勝と家永三郎を題材として」（『近代日本思想としての仏教史学』法蔵館、2012年）、寺戸尚隆「十五年戦争期の「日本仏教」の新展開——林銑十郎内閣と聖徳太子鑽仰」（『近代仏教』20号、2013年）等がある。

宗派の動向を検証した研究として、工藤英勝「曹洞宗の戦時教学——聖典の不敬字句問題と皇道仏教」（『現代宗教研究』40号、2006年）、福島栄寿「真宗大谷派と戦中・戦後史」（『季刊日本思想史』71号、2007年）、八木英哉「『時局伝道教化資料』に見る布教方針について——天皇＝阿弥陀仏の表現について」（『近代仏教』19号、2012年）、武田道生「浄土宗の日中戦争への対応——『支那事変と浄土宗 第壹輯』をてがかりに」（法然上人八百年大遠忌記念論文集『現代社会と法然浄土教』山喜房佛書林、2013年）等があり、「戦時教学」研究会編『戦時教学と真宗』全3巻（永田文昌堂、1988～95年）のような資料集も刊行されている。

さらに、慰霊研究、死者研究からのアプローチとして、山内小夜子「真宗大谷派における戦死者儀礼の変遷」（『現代宗教研究』40号、2006年）、末末文美士『他者・死者たちの近代』（トラ

ンスビュー、2010年)、白川哲夫「もう一つの靖国——戦死者追弔の近現代史」(『近代仏教』19号、2012年)等がある。

新野の研究は、これらの研究領域に重なるものであり、その意味で(小川原正道の研究とともに)近代日本の「仏教と戦争」の研究を進展させたものとして評価できよう。

3-2. 皇道仏教の研究

では、皇道仏教の先行研究はどのようなだろうか。

皇道仏教については、とくに上記の『戦時下の仏教』、『禅と戦争』、*Imperial-way Zen* で取り上げられている。『戦時下の仏教』では日蓮宗、『禅と戦争』では日蓮宗、真宗(と仏教者、仏教学者)、曹洞宗と臨済宗の「皇道禅」、*Imperial-way Zen* では「皇道禅」がそれぞれ論じられている。

また、これらの研究以外に、曹洞宗については、工藤英勝前掲「曹洞宗の戦時教学——聖典の不敬字句問題と皇道仏教」、日蓮宗については、澁澤光紀「高佐日焯の教学(一)」(『法華仏教研究』14号、2012年)、同「高佐日焯の教学(二)」(『法華仏教研究』16号、2013年)、西山茂「近代天皇制と日蓮主義の国体論の顕密変動——変動段階と両者の構造連関」(『東洋学研究』51号、2014年)等によって、皇道仏教の研究が深められている。

新野の研究はこれらの研究の系譜を継承し、さらに大陸布教という観点から皇道仏教研究を進展させた研究として位置づけることのできるであろう。

4. 皇道大本の研究

近代日本宗教史における〈皇道〉をめぐる言説や活動の意義やその役割を問い直すためには、「国家神道」研究、近代仏教研究のみならず、他の参照系も必要となる。それが、神道系新宗教の皇道大本の思想と運動である。

島園は、学校や軍隊や国家行事を通して「国家神道」が民衆の間で受け入れられた結果、宗教運動が国体論・皇道論を取り込み、「下からの国家神道」として展開していった事例として、出口なお・出口王仁三郎の大本教と田中智学の国柱会の事例を紹介している⁸⁾。また、西山茂も「国民的天皇崇拜儀礼が義務教育を通して国民のなかに広く深く浸透した明治末・大正期以降になると、天皇崇拜的な要素を自らの信行体系の中核に取り込んだ新しい宗教運動が台頭してくる。田中智学の国体論の日蓮主義や出口王仁三郎の皇道大本の運動がそれにあたる」⁹⁾と指摘している。

広く神道系新宗教と国体論の関係について分析しているのが、對馬路人である。對馬は、大本や天理本道(もと天理研究会、現在のほんみち)、璽宇、そして神政龍神会(大本の分派教団)の

疑似天皇制的・疑似記紀神話的な性格を論じ、宗教運動と国体論の関係を明らかにしている¹⁰⁾。

對馬は、1925～1935年の『人類愛善新聞』（大本（大本教）の外郭団体である人類愛善会の機関紙）の時期に、「大本の対社会的な救世の活動は、満洲事変前後より、人類同胞主義、国際協調・宗教融和を基調としたものから、愛国主義、国難の克服、そして皇道維新を基調としたものへ重点を移していったように見える」（41頁）と述べる。ただし、「その皇道主義や皇道維新の理念は、大正期の運動の中で言及した大正維新論のそれを引き継ぐものであ」った（40頁）という。大本における〈皇道〉の受容については、水内の論考に詳しいので、参照されたい。

5. お わ り に

近代日本宗教史で〈皇道〉が顕在化するの、明治初期と1930年代以降の時期である。しかし、その時期だけに限定せず、精査していくことが求められている。今回のワークショップでは、明治30年代から大正期、15年戦争期という時期の中で、神道系新宗教と近代仏教の領域で〈皇道〉がどのように用いられ、論じられ、扱われたのかが問い直された。

この第Ⅱ部が〈皇道〉研究の進展に貢献するのみならず、「国家神道」研究への問題提起となるとともに、「新たな日本宗教史像の構築」のための基礎作業となることを願う。

注

- 1) 本共同研究の目的や意義、班員等については、本共同研究のHP (http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/religious_histories/) を参照されたい。
- 2) 阪本是丸「『国家神道』研究の四〇年」（『日本思想史学』42号、日本思想史学会、2010年）、46頁。
- 3) 同上、52頁。
- 4) 島菌進『国家神道と日本人』（岩波新書、2010年）、57頁。
- 5) 同上、59頁。
- 6) とくに島菌「国家神道と近代日本の宗教構造」（『宗教研究』329号、日本宗教学会、2001年）、323～328頁、島菌前掲『国家神道と日本人』「第二章 国家神道はどのように捉えられてきたか？——用語法——」参照。
- 7) その研究史については、拙著『近代仏教という視座——戦争・アジア・社会主義』（ペリカン社、2012年）Ⅱ部「第三章 戦争は罪悪か？——二〇世紀初頭の仏教者の非戦論」を参照のこと。
- 8) 島菌前掲『国家神道と日本人』、166～172頁。
- 9) 西山茂「近代仏教研究の宗教社会学的諸課題」（『近代仏教』5号、1998年）、8頁。なお、田中智学の日蓮主義と国体の関係については、西山茂「日本の近・現代における国体論の日蓮主義の展開」（『東洋大学社会学部紀要』22巻2号、1985年）と「近代天皇制と日蓮主義の構造連関

近代日本宗教史研究と〈皇道〉(大谷)

——国体をめぐる「顕密」変動」(『シリーズ日蓮4 近現代の法華運動と在家教団』春秋社、2014年)、拙著『近代日本の日蓮主義運動』(法蔵館、2001年)を参照されたい。

- 10) 對馬路人「終末預言宗教の系譜——日本の新宗教を中心として」(『真理と創造』24号、1985年)、同「新宗教における天皇観と世直し観——神政龍神会の場合」(孝本編『論集日本仏教史9 大正・昭和時代』雄山閣、1988年)、同「大正・昭和前期の新宗教と国家——立て替え立て直しをめぐる宗教的緊張」(國學院大學日本文化研究所編『近代天皇制と宗教的權威』同朋社出版、1992年)、同「敗戦と世直し——璽宇の千年王国思想と運動(1)」(『関西学院大学社会学部紀要』63号、1991年)、同「敗戦と世直し——璽宇の千年王国思想と運動(2)」(『関西学院大学社会学部紀要』87号、2000年)、同「『人類愛善新聞』解説」(『復刻版 人類愛善新聞』別冊、不二出版、2013年)。